（研究資料紹介）芹沢銈介作　絵本『妙好人因幡の源左』

門脇　佳代子

Items of interest from the Museum collection
The picture book “Myokonin Inaba no Genza” by Serizawa Keisuke

KADOWAKI Kayoko

キーワード　：　因幡の源左　芹沢銈介　柳宗悦　衣笠一省

要旨

昭和54年7月1日、鳥取県の願正寺にて妙好人源左の50回忌法要が執り行われ、そこで芹沢銈介の型絵染絵本『妙好人因幡の源左』が初公開された。源左（1842-1930）は、無学ながら勤勉で清らかな信仰の生涯を送った人物で、このような在家の人を念仏宗では妙好人と呼ぶ。絵本の原作は昭和25年に刊行された柳宗悦・衣笠一省編『妙好人因幡の源左』であり、柳らによって収集された源左の言行録の中から26話が採録され絵本となった。本稿では、絵巻の発願者である願正寺住職・衣笠一省を手がかりに、新出の関連資料を紹介し、構図における芹沢の創意を読み解く。

Abstract

A memorial service commemorating the fiftieth anniversary of the death of *Inaba no Genza* was held at *Gansyoji* temple in Tottori, on July 1, 1979, and initial publication of the picture book, "*Myokonin Inaba no Genza*," stencil-dyed by *Serizawa Keisuke*, was timed to coincide with the ceremony. *Genza* (1842-1930) was known as a person who, while uneducated, lived a life of pure faith. We call such a person "*Myokonin*." The picture book is based on the original "*Myokonin Inaba no Genza*," a book edited by *Yanagi Soetsu* and *Kinugasa Issei* and first published in 1950. Twenty-six episodes involving *Genza* were taken from the original and featured in the picture book. *Kinugasa Issei*, head priest of *Gansyoji* temple at the time, commissioned the work, and in this paper, I introduced a new material related to him.

はじめに

日本を代表する染色家・芹沢銈介（1895-1984）の作品は幅広く、着物、のれん、カレンダーなど生活を彩るもの、屏風や軸などの鑑賞作品、商業デザインからインテリアや建築のデザインにいたるまで多岐にわたるが、特筆すべきに本にまつわる仕事が挙げられる。はじまりは柳宗悦の依頼を受けて昭和6年に手掛けた月刊誌『工藝』の表紙で、毎月500部の型染表紙を1年間にわたり制作した。これより以後、亡くなるまでの54年間に、装幀から挿絵、芹沢自身の発案による私本など、携わった書物は合わせて850冊を超えるといわれる[1]。その中から本稿では、絵本『妙好人因幡の源左』に焦点を当てたいと思う。

本作は型紙を用いて和紙に模様を染め出す型絵染によって作られた。型絵染とは、昭和31年に芹沢が重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定された際、「わが国の型染の特質をとらえ、その伝統に基づいて絵画的な文様を確立して特色ある」として、芹沢の手法に対し新造された語である。それまでの型染では分業されていた図案、型彫り、染めの工程を一貫して自ら行ったことが、芹沢ならではの芸術性豊かな作風を生み出した。型絵染は芹沢が生涯をかけて追究した染技だが、指先の絶妙な力加減と集中を要する型彫りを根幹とする故に、晩年には肉筆や板絵の作品が多くなる。『妙好人因幡の源左』は昭和54年、芹沢84歳の時に刊行されており、型絵染の大型絵本の最後を飾る作品である。

絵本の主人公である源左は、名を足利喜三郎（旧名　源左衛門）といい、天保13年（1842）の生まれで、89歳で亡くなるまで因幡国気多郡山根村（現在の鳥取市青谷町山根）に住し

た。農業と紙漉きを生業とし、文字の読み書きはできずとも、彼の清らかな信仰心は日常の行いの中に表われ、人々から「妙好人」と讃えられた。妙好とは白蓮華の美しさを称えた言葉で、特に念仏宗（浄土門）において優れた信仰を持つ在家の人を指す。源左は中でも還相に自らを活かした典型的な妙好人で、信仰心篤く、勤勉な人柄は生前より多くの人に慕われた。現在でも当地には「源左さん」への思慕が生きている。

源左の名を世に広めたのは、柳宗悦（1889-1961）であった。哲学者であり民藝運動の理論的指導者でもあった柳は、昭和23年11月に鳥取を訪ねた折、突然来訪した俳人田中寒楼翁から初めて妙好人源左の名を耳にした。その逸話に心を打たれ、早くも翌24年8月18日からおよそ1ヶ月間、現地にて源左の言行を可能な限り収集する調査を実施したが、この時の最大の支援者が願正寺の住職、衣笠一省（1920-1991）であった。願正寺は浄土真宗の本願寺派に属し、寺の裏手に住まいした源左にとっては所縁深い手次寺である。衣笠との出会いについて柳は、「住職の衣笠一省氏は有為の若い僧侶で、源左のことには熱心であり、一家の厚い待遇を受けた。」[2]と述べており、滞在場所の便宜から、手控えに集めておいた言行録の提供、源左の縁故者に聞き取りを行う際の方言の通訳まで、衣笠は協力を惜しまなかった。柳と衣笠を引き会わせたのは鳥取民藝運動の中心的人物であった吉田璋也で、源左に関心をもった柳のため、それまで面識のなかった願正寺を訪ね、柳の滞在を依頼、快諾を得たという。調査の成果は、昭和25年9月に大谷出版社より柳宗悦・衣笠一省編『妙好人因幡の源左』として刊行された。なお本書は、昭和35年に百華苑より改訂増補が刊行されたが、当時病床についていた柳は衣笠に改訂に伴う一切の仕事を委ねたことを「新版序」の中で述べている[3]。

絵本『妙好人因幡の源左』は、衣笠一省の発願により芹沢銈介に依頼されたもので、柳宗悦・衣笠一省編『妙好人因幡の源左』に収められた言行録298章から26話を取り上げて絵本としている。本作の刊行は昭和54年の源左50回忌法要に合わせて行われた。同年7月1日から5日にかけて願正寺で催されたその法要は実に盛大なもので、本山の西本願寺より門主が同席し、参拝に集まった人々はのべ約6000名に及んだという[4]。願正寺ではこの日、完成なったばかりの絵本一冊が公開され、期間中、本堂には額装された一枚刷が長押上に並んだ。（図1）まさに追善供養の作といえ、発願者の熱意が伝わってくる。この度、願正寺のご協力を得て絵本『妙好人因幡の源左』関連資料の調査を行い、発願者である衣笠一省のご遺族より貴重なご助言をいただいた。これら若干の新知見を加え、作品紹介を行い、今後の研究の一助としたい。

図1　願正寺本堂内　於源左50回忌法要

1. 芹沢銈介作　絵本『妙好人因幡の源左』（口絵4）

絵本『妙好人因幡の源左』は和綴じに製本された大型本で、縦38.0㎝、横36.5㎝、厚1.8㎝におよぶ。表紙は、灰色地の絽布[5]に大きく一輪の白蓮華を白抜きに模様染めし、左上方に「妙好人因幡の源左」の文字を墨で型絵染めした題箋を貼る。限定本らしく、漆塗りの木製あわせ函（透漆、縁は黒漆、黒漆による題字）の中に納め、さらにそれを和紙製夫婦函に納める。

用紙には、大因州製紙協業組合（鳥取市青谷町山根）の因州和紙を用いる。大因州製紙協業組合の創業者である塩義郎は、柳が調査のため昭和24年に願正寺へ滞在した際、柳と出会い紙漉きに生きることを決意、やがて吉田璋也を通じて芹沢銈介のもとで染色を学んだ。青谷の地は古くより紙の生産が盛んで[6]、源左の家も代々紙漉きに従事したと見られる。

絵本では源左の肖像を巻頭におき、続いて26話を収録する。見開きの2ページで1話を表わし、いずれも左ページに挿絵を設けている。各話の標題および画中詞の源左語録は「表1」の通り。各個の物語解説については、今村秀太郎「「芹沢本」について」[7]にまとめられているので参照されたい。

本文中で用いる色は、黄土と濃淡の墨色の3色のみで、本作は芹沢作品の中でも特に落ちついた印象を与える。この点について、衣笠一省の長男・告也氏がかつて芹沢に直接、色数の少ないことを尋ねたところ、「これでよいのだ」という答えが返ってきたという。苦しいことも悲しいことも「ようこそ　ようこそ」の心で受け入れ[8]、清貧な一生を送った源左に、相応しい配色と考えたのであろうか。絵本では源左の物語を終え、最後に登場する願正寺の一図のみが鮮やかに色差しされ、青い木立からのぞく赤い瓦屋根が目を惹く。初めて願正寺を訪れた柳が「石州赤瓦の大きな屋根が、高く聳えてゐるのが遠くからも見られた。」[9]と記す、願正寺を象徴する風景

表1　絵本『妙好人因幡の源左』　語録一覧

標題	源左語録（画中詞）	出典 柳宗悦・衣笠一省編『妙好人因幡の源左』 百華苑　昭和35年（平成16年改訂版）
妙好人源左	ようこそようこそ	
1　入信	おのが使ひにおのが来にけり	1　入信(1)（pp.2-4）
2　芋名月	こりゃ手でもきずさしちゃならんだがやあ	4　芋名月（p.8）
3　芋盗人	あゝ今日はおらげの掘らん番だっていのう	5　芋盗人（p.9）
4　柿の木	人が取ってもやっぽり家の者が餘計食ふわいや	6　柿の木（pp.9-10）
5　大豆畑	先の方のまっとえゝのを食はしたんなはれな	7　大豆畑（p.10）
6　干柿	そろそろえゝやなところを沢山もって帰んなはれよ	9　干柿（p.11）
7　トンビ	誰かに借りられましてなあ　雨もふっとるしその人に気の毒でござんしてなあ	11　トンビ（pp.11-12）
8　御熊坂	おしけりゃ上げもしようが　まあ如来様のことを話さしてつかんせい	12　御熊坂（一）（pp.12-13）
9　源左と天香	有難うござんす　おらにゃ堪忍して下さるお方があるでする堪忍がないだがやあ	16　源左と天香（二）（pp.18-19）
10　偽同行	偽になったらもうええだ　中々偽になれんでのう	30　偽同行（p.24）
11　風呂	しっかりしとってえゝがのう　ぼんやりしとってえゝがやあ	36　風呂（p.26）
12　乳呑児	おらあ打ちかけたら面白いだけ止められんだいなあ	57　乳呑児（pp.36-37）
13　追肥	どれこっちが先だがやあ	63　追肥（p.40）
14　山越え	よう持たして下んした　ようこそようこそ　今日は大儲をした大儲をした　なんまんだぶつなんまんだぶつ	67　山越（p.42）
15　お宮の獅子	片方さえ口をふさいで居りやあ事は起りゃせんけいのう	74　お宮の獅子（p.47）
16　母	こんつぁんに足るほど負われたむんだけのう	90　母（p.56）
17　草鞋の紐	親はなあ子が可愛いだけえ草鞋の紐がほどきたいだいなあ	92　草鞋の紐（p.56）
18　蜂	われにも人を刺す針があったかいやあ　さてもさてもようこそようこそ	96　蜂（pp.58-59）
19　夕立雨	ようぬれたのう　ありがとうござんす　鼻が下に向いとるでありがたいぞなあ	97　夕立雨（p.59）
20　掌	親からもろうた手はつよいもんだのう　いっかなさいかけせえでもえゝけのう	125　掌（p.70）
21　牛	性のきつい牛だって憎まずに可愛がってつかんせえ　叱って酷うするけれひねくれっだがやあ	138　牛（二）（p.75）
22　牛	デンに一人りゃ持たせらせんぞ	140　牛（四）（p.76）
23　後生の儲け	仕事どころかいの　後生を儲けるだけのう	194　後生の儲け（p.100）
24　部落の総事	魚が大豆に代っただけどえっと食ってごしなはれよ	203　地区の総事（pp.104-105）
25　自在鉤	わたしゃづらがき　あなたはござる　落しゃせぬぞよ　火の中へ	p.189
26　鈴の玉	鈴でも玉が入りゃ鳴るけっど入っとらんと鳴らんけんのう	215　鈴の玉（p.111）

である。

ところで絵本の表紙裏には、「なむあみだぶつ」の七字と、その両脇に「妙好人因幡の源左五十回忌　讃仰大法要」「発願因幡高林山願正寺」の文字が型絵染で表わされ、発願の意図は明確なのだが、本作には4通りの奥付が存在する。これは昭和54年の初刷200部に加え、翌年の再刷50部、また番外のものがあるためで、以下それぞれの奥付を示した上で、各本における変更点について整理したい。

①『妙好人因幡の源左』（以下「200部本」）

個人所蔵（図２－１）

奥付）昭和五十四年七月一日開板
　編　三ツ木幹人
　絵・型・染　芹沢銈介
　蔵版　願正寺　鳥取県気高郡青谷町山根
　用紙　大因州製紙協業組合　鳥取県気高郡青谷町山根
　製作　東峰書房　東京都千代田区九段南四
　本書は限定二〇〇部の内の第一六番本也

②『妙好人因幡の源左』（以下「家蔵本」）

個人所蔵（図２－２）

奥付）昭和五十四年七月一日開板
　編　三ツ木幹人
　絵・型・染　芹沢銈介
　蔵版　願正寺　鳥取県気高郡青谷町山根
　用紙　大因州製紙協業組合　鳥取県気高郡青谷町山根
　製作　東峰書房　東京都千代田区九段南四
　本書は家蔵二〇部の内第一番本也

③『妙好人因幡の源左』（以下「50部本」）

東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館所蔵（図２－３）

奥付）昭和五十五年七月一日刊
　蔵版　願正寺
　編　衣笠一省
　絵・型・染　芹沢銈介
　用紙　山根紙
　製作　願正寺
　本冊限定五十部内　第三三番也

④『妙好人因幡の源左』（以下「願正寺本」）

個人所蔵（図２－４）

奥付）昭和五十四年七月一日刊
　蔵版　願正寺
　編　三木幹人
　絵・型・染　芹沢銈介
　用紙　山根紙
　製作　東峰書房
　（本冊限定二〇〇部内）願正寺本拾部ノ内一番也

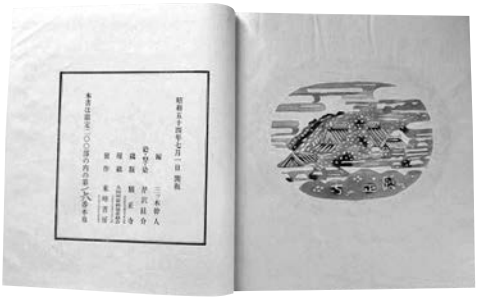
以上の４本の内、「願正寺本」は現在確認できたものが１冊のみで他に類例がなく[10]、奥付の記載内容にも疑義が持たれるため後述するものとし、先に「200部本」、「家蔵本」、「50部本」の３本について比較する。

はじめに昭和54年７月１日開板と記す「200部本」と「家蔵本」とを比べると、奥付末尾の一文「限定二〇〇部の内の第□番本也」「家蔵二〇部の内の第□番本也」を唯一の相違点とし、奥付のみならず冊子の内容全てが一致する。それに対して昭和55年７月１日刊行の「50部本」では、編集の三ツ木幹人が衣笠一省へ、製作の東峰書房が願正寺へ変わった他、大きな変更が認められる。それは活字ページの有無であり、奥付からして「200部本」と「家蔵本」は活字、「50部本」は型絵染で記す。さらに「200部本」と「家蔵本」では活字による目次と、26話各図に対して活字の詞書が付されているのに対し（図３－１)、「50部本」では目次はなく、詞書に代わって各話ページ中央に標題が型絵染で表わされる（図３－２)。そのため「50部本」には、内容を補足するための別冊活字本「妙好人因幡の源左・語録」（縦14㎝　横5.3㎝　折本）が付録されている。この「語録」は、柳宗悦・衣笠一省編『妙好人因幡の源左』を転載したもので、絵本所収の物語から12話（「ようこそ　ようこそ」、「入信」、「柿の木」、「大豆畑」、「源左と天香」、「偽同行」、「お宮の獅子」、「夕立雨」、「掌」、「牛」、「後生の儲け」、「鈴の玉」）を取り上げている。

これら３本の制作の後先については、昭和54年10月26日に芹沢から衣笠一省に宛てた手紙の中に、「（略）三ツ木本詞書の活字部分など、大体上出来、一応安神（ママ）いたしました。当方へ来て居ります分五十冊、家蔵本も含めての数ですが、三十日、東京の堀尾氏の御指示うけ度思ます。詞書巧みにレイアウトされ、御歓び戴ける事と願ます。」（個人蔵・未公開）とあり、これによって、昭和54年７月以降も順次製本が進められたことと、「200部本」200冊と「家蔵本」20冊の計220冊が初刷であったことが知られる。初刷刊行の翌年、活字を型絵染に変更し刊行された「50部本」では、奥付に「編　衣笠一省」「製作　願正寺」と変更していることを踏まえると、当時を知る人も今では少なく詳細は不明であるが、願正寺の周辺において再刷の動きが出たものと考えられよう。

次に「願正寺本」だが、奥付によれば10部制作とあるが、現在のところ個人所蔵の一冊しか発見されていない。この一冊は発願者である衣笠一省のために作られたとみられ、奥付には「本冊限定二百部内　番也」とある型絵染の余白部分に、手書きで「願正寺本拾部ノ内一」と墨書されている。（図2-4）表紙は通常の灰色とは異なる鮮やかな臙脂色の絹布を用い、他では型を用いて黒漆で染め出す木製函の題字も、青と赤の絵の具を流し込みしたマーブル地の和紙を題箋として貼付けるなど、大胆な変更がなされている[11]（図4)。奥付内容を一見すると、

図２　絵本『妙好人因幡の源左』各本奥付



２－１　200部本（奥付）

２－２　家蔵本（奥付）

２－３　50部本（奥付）

２－４　願正寺本（奥付）

図3　絵本『妙好人因幡の源左』「柿の木」

３－１　200部本「四　柿の木」

３－２　50部本「四　柿の木」

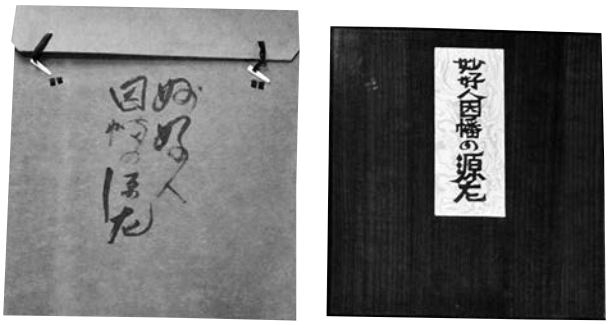


図4　『妙好人因幡の源左』願正寺本　木製函・外函

「200部本」を転用したように見えるが、実際には「200部本」の奥付は活字、「願正寺本」では型絵染という違いがある。むしろ型絵染という点では「50部本」に共通し、活字を用いず制作された本冊の内容は「50部本」と一致する。こうしたことから「願正寺本」の制作は、「50部本」に近い時期ではなかったかと考えられる。奥付の内容が、開版・編・製作ともに「200部本」「家蔵本」と同じなのは、一般の頒布用作品ではなく、発願者への個人的作品であったため、あえて初刷の刊行情報を記載したと推測される。

2. 芹沢銈介作　絵本『妙好人因幡の源左』関連資料

①板絵「妙好人因幡の源左」20枚　個人所蔵（図5）

合羽刷　手彩色　各縦14.7×横18.7×厚1.2㎝

型絵染であった絵本に対し、板絵では合羽刷を用いる。合羽刷とは紙や板の上に置いた型紙の上から刷毛で絵の具を摺り込み、模様を染め出す技法。これらの板絵では輪郭線を合羽刷し、その上から手彩色を施している。絵本の挿絵は黄土と墨のみで表現していたが、板絵では朱、黄、緑青、青、茶、白、とさまざまな色を使い、筆彩には型にこだわらない勢いが見てとれる。

昭和55年1月18日から23日の間、日本橋東急画廊で開催された「妙好人因幡の源左語録型絵本展」に、下絵原画や型絵染作品28点と共に板絵作品20種が陳列されたことが知られ、当時の記事は、特に板絵作品の人気が高かったと伝えている[12]。絵本『妙好人因幡の源左』の刊行を記念して、頒布用に制作されたものであろう。

ここに紹介する板絵は20種揃いのもので、それぞれの画題は「表2」に挙げる通りである。飯が出ると「飯よりうまいものがあるかいや」といい、餅が出ると「餅よりうまいものがあるかいや」と語った源左をとり上げる「飯と餅」[13]の2枚（図5-19・5-20）を除き、絵本採録の逸話と同じ。絵本と板絵とを対照すると、大略は絵本の構図に倣っていることが分かるが、板絵は絵本に比べて小形であることから、画中詞が簡略化されているものが多い。中には「部落の総事」（図5-16）のように図柄が変更されたものもある。

表2　板絵「妙好人因幡の源左」　語録一覧

	源左語録（画中詞）	絵本『妙好人因幡の源左』標題
1	ようこそ　ようこそ	1　妙好人源左
2	手でもきずさしちゃならんだがやあ	2　芋名月
3	あゝ今日ハおらげの掘らん番だっていのう	3　芋盗人
4	人が取ってもやっぽり家の者が餘計食ふわいや	4　柿の木
5	まっとえゝのを食はしたんなはれな	5　大豆畑
6	堪忍して下さるお方があるでする堪忍がないだがやあ	9　源左と天香
7	偽になったらもうえゝだ	10　偽同行
8	しっかりしとってえゝがのう　ぼんやりしとってえゝがやあ	11　風呂
9	どれこっちが先だがやあ	13　追肥
10	よう持たして下んした　今日は大儲をしたなんまんだぶ	14　山越え
11	片方さえ口をふさいで居りや事ハ起りゃせんけいのう	15　お宮の獅子
12	鼻が下に向いとるでありがたいぞなあ	19　夕立雨
13	親からもろうた手ハつよいもんだのう	20　掌
14	デンに一人りゃ持たせらせんぞ	22　牛
15	仕事どころかいの　後生を儲けるだけのう	23　後生の儲け
16	魚が大豆に代ったゞけど　えっと食ってごしなはれ	24　部落の総事
17	わたしゃづらがきあなたはこざる　落しゃせぬぞよ火の中へ	25　自在鉤
18	鈴でも玉が入っとらんと鳴らんけんのう	26　鈴の玉
19	飯よりうまいものがあるかいやあ	
20	飯よりうまいものがあるかいやあ	

図5　板絵「妙好人因幡の源左」　※右は参考（50部本より）

5－1　「妙好人源左」

5－2　「二　芋名月」

5－3　「三　芋盗人」

5－4

「四　柿の木」

5－5

「五　大豆畑」

5－6

「九　源左と天香」

5－7

「十　偽同行」

5－8

「十一　風呂」

5－9

「十三　追肥」

5－10

「十四　山越え」

5－11

「十五　お宮の獅子」

5－12

「十九　夕立雨」

5－13

「二十　掌」

5－14

「廿二　牛」

5－15

「廿三　後生の儲け」

5－16

「廿四　部落の総事」

5－17

「廿五　自在鉤」

5－18

「廿六　鈴の玉」

5－19

5－20

②型紙

芹沢の没後、自宅兼仕事場であった東京・蒲田の工房には、終戦の昭和20年から亡くなる前年の昭和58年までの39年間に彫られた約10,000枚に上る型紙が残された。これらは現在、東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館にて保管されており、この膨大な中に『妙好人因幡の源左』の型紙が2件確認できる。

イ．絵本『妙好人因幡の源左』型紙　32枚

東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館所蔵

型絵染で制作された絵本『妙好人因幡の源左』の型紙。型絵染は模様を彫った型紙を用いて布や紙に防染糊を置き、刷毛で引き染め、あるいは染液にて浸染した後に、水洗いして糊を落とし、模様を染め出す。32枚の内訳を見ると、表紙に用いたもの2枚（題字・蓮華、各1枚）、表紙裏の発願文が1枚、奥付が1枚あり、これら表紙の表裏と奥付を除く28枚は、一つの型紙に2ページ分が合わさったものとなっている。これは本作が袋綴じの和装本であるためで、袋綴じを開いた状態では原則として右側に挿絵、左側に次ページの標題がくる。奥付の内容は「50部本」に該当し、32枚の型紙で「50部本」に必要な全てが揃う。ただし、標題部分に関してはいずれも挿絵部分とは別に彫ったものを貼り付けて1枚の型紙としており、挿絵部分が昭和54年の初刷にも用いられた可能性は否定できない。

ロ．板絵「妙好人因幡の源左」型紙　23枚

東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館所蔵

もう一つは、先に紹介した板絵「妙好人因幡の源左」に用いられた型紙である。「妙好人因幡の源左板絵二十枚」と描かれた封筒に収められており、袋の文字は芹沢の自筆と見られる。いずれも縦20.5㎝、横24.5㎝の小型のもので、紗張りを行わない。合羽刷りのため、各所に墨や絵の具の痕跡が残っている。板絵の図柄は全部で20種だが、型紙23枚の内、異なる2枚を合わせて1つの図柄をつくるものがある。「柿の木」、「お宮の獅子」、「掌」の3点で、結果23枚の型紙で板絵20枚の全てとなる。

③下絵

これまで紹介された絵本『妙好人因幡の源左』関連の下絵には、昭和60年に宮城県美術館で開催された「芹沢銈介展」出品の個人所蔵のもの[14]、静岡市立芹沢銈介美術館所蔵の2点[15]があるが、新たに東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館所蔵の1点と、個人のもとに伝わった18点について報告したい。

イ．下絵「芋名月」（図6）

東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館所蔵

縦31.0×横48.5cm　肉筆墨書

右半分に記す詞書には「芋名月　自家の畠の芋を他人にほられてゐるのを見て鍬をおいて帰って来た」とあり、画中の源左語録は「こりゃ手でもきずさしちゃならんだがやあ」。絵本の第2話に採録された逸話で、源左がある晩、自分の畑に人が掘って盗った跡があるのを見て、その盗人が怪我をしないようにとわざわざ鍬を置いて帰ったというもの。流れる筆致で一息に描いている。

図6　下絵「芋明月」

参考）「二　芋明月」

ロ．下絵　18枚（図7）　**個人所蔵**

各縦23.5×横28.8cm　肉筆墨書

18枚の中には重複する主題もあるため、下絵にあるのは下記の14題。この内2題は下絵のみのもので、残りの12題は絵本『妙好人因幡の源左』に採録する逸話である。

「手」　1枚
「風呂／御飯」　1枚
「一　入信」　3枚
「三　芋盗人」　1枚
「四　柿の木」　1枚
「五　大豆畑」　1枚

「八　御熊坂」　2枚
「十一　風呂」　2枚
「十二　乳呑児」　1枚
「十五　お宮の獅子」　1枚
「十九　夕立雨」　1枚
「二〇　掌」　1枚
「二四　部落の総事」　1枚
「二五　自在鈎」　1枚

絵本にない2枚について柳宗悦・衣笠一省編『妙好人因幡の源左』の中に探すと、「三六　風呂」「一二六　手」「一二八　御飯」を描くと知られる[16]。画中詞に「手を洗って押しいただく源左」（図7-1）とある一枚は、田仕事が終わり手を洗って押しいただく源左の姿を描く「手」。もう1枚は中央に縦線を引いて、2話を取りあげる（図7-2）。右の画中詞「おらあおこわが好きでやあ　おらあおかゆがえゝがやあ」は、「風呂」に登場する飯の炊き加減への源左の言葉。左の「どんな食物にもええ食いじおがあるでのう」は、言い回しに違いはあるが「御飯」に該当しよう。

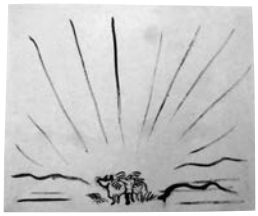
複数枚の下絵が見られるのは、「一　入信」3枚、「八　御熊坂」2枚、「十一　風呂」2枚の3題。源左の信仰がゆるぎないものとなった瞬間を表わす「入信」を例に、最終的な構図に決定するまでの試行を見ていくことにする（図7-3、7-4、7-5）。源左を仏門に誘う因縁は18歳の時の父の急死であり、死の間際「おらが死んだら、親様（阿弥陀仏）を頼め」といい遺した言葉に悩み、真剣な聞法がはじまった。答えを求める苦闘の日々が続き、ついに30歳前後のある朝、その時がやって来る。草刈りを終えた源左は、草の束があまりに重く自分では背負いきれなかったため、牛に詫びながら全てを牛に預けた途端、阿弥陀の他力の何たるかを突如として理解したのであった。下絵では牛と源左の姿が、大中小と三段階に描かれ、背景の捉え方にも違いが見られる。絵本に採用された構図は、朝日の光が阿弥陀の御来光のごとく射すものである。また木々や景物をあえて省いたのは源左の心象を表わすためであろうか。牛と人の大きさは、阿弥陀の前に自覚した自身の小ささの表われにも感じられる。

これら18枚の下絵は発願者・衣笠一省の下に伝わった。絵本の26話は芹沢銈介が選定し、方言や語録の意味内容については衣笠が助言を行ったと推測されるが、制作の元となる下絵がまとまって残ったことは貴重である。

図7　下絵　18枚　個人所蔵　※右は参考（50部本より）

7－1

7－2


7－3

「一　入信」

7－4

7－5

7－6

「二　芋盗人」

7－7

「四　柿の木」

7－8

「五　大豆畑」

7－9

「八　御熊坂」

7－10

7－11

「十一　風呂」

7－12

7－13

「十二　乳呑児」

7－14

「十五　お宮の獅子」

7－15

「十九　夕立雨」

7－16

「二〇　掌」

7－17

「二四　部落の総事」

7－18

「二五　自在鉤」

おわりに

絵本の原作たる『妙好人因幡の源左』の編著者・柳宗悦は、昭和35年の改訂増補刊行に際し、「私は今迄幾冊かの本を世に贈ったが、恐らく何人からも又何時でも人々から愛読されるのは、この一冊ではないかと考える」[17]と述べている。柳は妙好人について、いかなる仏典も、祖師の説法も、学僧の教学も、それらが真実であると証する存在がいなければ架空の論であり、妙好人の存在こそは浄土の法門を価値づけるものであると説いた[18]。民藝運動の主導者としての柳について、白鳥氏は「具体的な物に付属する美と、心の問題を取り扱う宗教もまた、柳にとって当然表裏一体のものだった」と指摘し、柳の視野に妙好人が加わって、はじめて柳の民藝論は完成したとする[19]。民藝運動の同人の一人として活躍した芹沢だが、昭和２年、雑誌『大調和』に掲載された柳の「工芸の道」を読み、生涯の一転機となるほどの深い感銘を受けて後、柳を生涯唯一人の師と仰いだ。芹沢が絵本『妙好人因幡の源左』の制作について衣笠から依頼を受けたのは、柳没後のことであるが、そこには深い縁を覚える。

源左の行いの背景には深い信仰が流れており、芹沢の挿絵は単なる状況描写に止まらない。中で印象的な一枚は「十偽同行」（図８）である。この絵は、ある人が源左に向けて、あなたは本当の信者だが私は偽同行に過ぎないと話した時に、

図8　絵本『妙好人因幡の源左』「十　偽同行」

源左が「偽になったらもうええだ、中々偽になれんでのう」と答えたという話を描いている[20]。柳はこの話を、「全く真宗の教へを端的に示したもの」[21]としてとり上げている。つまり、自分が本当に偽の人間だと分かることは、阿弥陀の他力に支えられている自分を見出すことであり、それは既に救われていることと同じなのである。芹沢はこの逸話を、念仏する二人の人物によって表現した。左を向いて念仏する男が源左で、その背の後ろで手を合わせる女が偽同行を問うた人物である。女は源左の先におわす阿弥陀に向かって合掌するようにも、「本当の信者」である源左に対して合掌しているようにも見える。おそらくは、その両者に向けて念仏をしているのではないだろうか。しかし源左は自分が頭を下げられる存在とは思わない。だから背を向け、共に念仏をしようとその身で誘う。妙好人源左の行いに対する深い洞察があってはじめてできる表現である。

絵本『妙好人因幡の源左』の発願時期については、芹沢自身が昭和45年3月に「昨秋紅葉も終りの頃『妙好人源左絵語』取材のため鳥取を訪れ家人等と大山に登り倉敷へ廻って来ました。」[22]と書いていることから、これより以前に依頼を受けたと考えられる。衣笠告也氏によれば、完成までに10年ほどの歳月を要し、その間、衣笠一省夫妻は鳥取から東京へ幾度か上京し、蒲田の芹沢宅を訪問していたという。一方の芹沢も鳥取の願正寺に二度足を運び、特に昭和52年12月、二度目の訪問では、この地の風景や服装、暮らしなどを写真やスケッチにおさめた。現地では多くの人が協力し、源左の時代の農夫の服装をまとってモデルを務めたり、資料写真の撮影を行うなどした[23]。昭和54年の源左50回忌法要に目標を定めて後、制作は佳境に入ったものとみられる。衣笠にとって発願から完成までの年月は短いものではなく、その間には制作が進展しないことを案じ、苦心する姿もあったというが、そうした様々を乗りこえて絵本『妙好人因幡の源左』に結実したことは、この一冊がまさに泥池に咲く一輪の白蓮華のごとき「妙好品」であることを思わせるのである。

付記

芹沢銈介作品の掲載にあたり芹沢恵子様の格別のご配慮と使用許可をいただき、ここに深く感謝申し上げます。また調査へのご高配を賜りました衣笠告也様（願正寺）、奥村寧子様（鳥取市あおや郷土館）に深く御礼申し上げます。英文要旨については東北福祉大学のKen Schmidt准教授にご協力をいただきました。感謝申し上げます。

註

1）　芹沢長介「ごあいさつ」『芹沢銈介　私本・私家本・装幀本』東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館　平成10年
2）　柳宗悦「後書」柳宗悦・衣笠一省編『妙好人因幡の源左』大谷出版社　昭和25年（所収『柳宗悦全集』第19巻　筑摩書房　昭和57年　p.398）
3）　柳宗悦編著・衣笠一省改訂増補『妙好人因幡の源左』昭和35年　百華苑　p.14
4）　衣笠浩也氏のご教示による。
5）　繭から糸を繰る時、はじめに出てくる太さにむらのある粗悪な糸で織った布。
6）　森田明子「青谷と民藝」（『因幡地方の名品－鳥取市の文化財のあれこれ－』鳥取市歴史博物館編　平成21年）によれば、因幡の紙の生産は古く『延喜式』に遡り、17世紀後半の小泉友賢著『因幡民談記』には気多郡の郷土産名物として各種の和紙が挙げられ製紙業の盛んであったことが窺われるという。昭和51年には県の無形文化財に因州青谷こうぞ紙が指定された。
7）　今村秀太郎「「芹沢本」について」『芹沢銈介全集』第6巻　中央公論社　昭和56年　pp.161-176
8）　柳宗悦「源左の一生」（柳宗悦・衣笠一省編『妙好人因幡の源左』大谷出版社　昭和25年）柳宗悦編著・衣笠一省改訂増補『妙好人因幡の源左』昭和35年　百華苑　p.178
9）　註1に同じ　p.398
10）個人所蔵の『妙好人因幡の源左』関連資料を調査させていただいた際、「願正寺本」の奥付に当たると見られる一枚摺が確認された。そこには、「本冊限定二百部内　番也」とある型絵染の余白部分に手書きで「願正寺本拾部ノ内七　但額装用」と記され、当初より10部の内の1部は額装の便を図るため製本されなかったことが知られる。
11）口絵4で紹介した東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館所蔵本に関しても、理由は定かでないが、木製合わせ函の題字が通常と異なる。絵本『妙好人因幡の源左』の木製函は黒漆を用い型絵染で題字を表わすのが基本だが、工芸館本では型紙を用いず、漆による肉筆文字である。書体から、おそらくは芹沢銈介自身の筆と見られる。
12）「妙好人因幡の源左語録型絵本展」『民芸手帳』3月号　昭和55年　pp.52-53
13）以下、『妙好人因幡の源左』の言行録を引用する場合、改訂増補版を用いるものとする。「三七　飯と餅」（柳宗悦編著・衣笠一省改訂増補『妙好人因幡の源左』百華苑　昭和35年　p.27）
14）展覧会図録『芹沢銈介展』宮城県美術館　昭和60年　図版掲載 p.87
15）『芹沢銈介　その生涯と作品』静岡市立芹沢銈介美術館　平成20年　図版掲載p.79／『芹沢銈介作品をめぐる　30の物語』静岡市立芹沢銈介美術館　平成23年　図版掲載 p.61
16）柳宗悦編著・衣笠一省改訂増補『妙好人因幡の源左』（百華苑　昭和35年）参照。「三六　風呂」（p.26）、「一二六　手」（p.70）、「一二八　御飯」（p.71）

17） 柳宗悦「新版序」柳宗悦編著・衣笠一省改訂増補『妙好人因幡の源左』百華苑　昭和35年　p.15
18） 柳宗悦「妙好人」『柳宗悦・宗教選集4』春秋社　昭和35年（所収『柳宗悦全集』第19巻　筑摩書房　昭和57年　pp.665-675）
19） 白鳥誠一郎「妙好人研究」『別冊太陽　柳宗悦の世界』平凡社　平成18年　pp.150-152
20） 柳宗悦編著・衣笠一省改訂増補『妙好人因幡の源左』（百華苑　昭和35年）参照。「三○　偽同行」（p.24）
21） 柳宗悦「妙好人の話」昭和26年4月17日録音の放送原稿（所収『柳宗悦全集著作編』第19巻　筑摩書房　昭和57年　p.418）
22） 芹沢銈介「近況おしらせ」（「芹沢銈介装幀集第六回頒布付録」吾八書房　昭和45年）
23） 「『妙好人因幡の源左』の制作」『芹沢銈介　その生涯と作品』静岡市立芹沢銈介美術館　平成20年　p.79